

弓削皇子と額田王の贈答歌について

— 詠まれている物から —

武田 春子

〔抄録〕

弓削皇子と額田王の贈答歌についてであるが、詠まれている物から贈答歌の詠まれた時期を推測する、あるいは現体制に不満を持つ弓削皇子が昔を懐かしむ気持を詠んだ歌を額田王に送り、それを読み取った額田王が弓削皇子に答えたという解釈がされ、そこに短命で薨去した弓削皇子の人生を重ねた上で、弓削皇子の歌に「切なさ」・「儂さ」・「無常観」という特徴付けが従来されてい

るが、それは「ほととぎす」を中心に取り上げることによって論じられているので、当該論文においては「ほととぎす」を中心にそれ以外の読まれている物にも着目して考慮してみたいのである。

キーワード ほととぎす、弓絃葉、禪讓、松、相聞

序

吉野の宮に幸したまひし時に、弓削皇子の、額田王に贈り与へし

歌一首

古に恋ふる鳥かもゆずるはの御井の上より鳴き渡り行く

(巻一・一一一)

額田王の和し奉りし歌一首 倭の京より進り入れたり

古に恋ふらむ鳥はほととぎすけだしや鳴きし我が思へること

(巻二・一一二)

吉野より蘿生ひたる松の柯を折り取りて遣はしし時に、額田王の

奉り入れし歌一首

み吉野の玉松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく

(巻二・一一三)

この贈答歌は、『万葉集』巻二の持統天皇の時代に詠まれているのであるが、先行研究においては当時の持統天皇の治世、特に皇位継承

の情勢を踏まえて「天武天皇の治世を懐かしむ」という思いを共有した贈答歌であるとして、そこから弓削皇子の歌と生涯を関連させるといふ論^①が発表されて以降様々に取り上げられているのであるが、近年はその様な意味で詠まれたのであれば、捉え様によっては天武天皇を貶める部分も見受けられる点も含まれる為に、弓削皇子と額田王双方の知識を元とした謎掛けあるいは言語遊戯といふ論も発表されている^②。

その根底にある物として先行研究で一番着目されているのが、弓削皇子が詠んだ歌にある「鳥」であり、額田王が詠んだ歌にある「ほととぎす」なのであるが、逆に言えば「ほととぎす」以外の物はあまり着目されていないのではないだろうか。

この点を踏まえた上で、弓削皇子と額田王の贈答歌において詠まれている物に着目し考察していきたい。

第一章 歌が詠まれた時期について

題詞から順を追うと、持統天皇が吉野宮に行幸した際に弓削皇子が供奉しており、額田王は供奉せず倭の京に留まっていたことがいえるのである。この「倭の京」についてであるが、飛鳥浄御原宮あるいは藤原宮か歌の詠まれた時期によって変化することになる。また、吉野宮に滞在している弓削皇子と額田王が一連のやり取りを行う為にはそれが飛鳥浄御原宮あるいは藤原宮のどちらであったとしても可能である日数が必要になる。なお、持統天皇が在位中に吉野に行幸した回数^③は合計三十一回にも上るが、その中から滞在していた日数並びに贈答歌中において詠まれている物から見えていくこととしたい。

まず、滞在していた日数についてであるが、これには下記の条件を満たす必要があるので挙げてみたい。

- ① 弓削皇子から額田王への贈答歌
- ② 額田王の弓削皇子への応答歌
- ③ 弓削皇子から額田王へ蘿が生えた松の枝を贈る
- ④ 額田王の弓削皇子への応答歌

以上の条件を満たすには、吉野宮から倭の京を二往復する日数が最低でも必要となる。これに加えて、弓削皇子の歌に「ゆずるは」が額田王の歌に「ほととぎす」が、詠まれていることを考慮する必要がある。

これらの点を考慮すると、ほととぎすが鳴くのは初夏であることから、初夏の頃に贈答歌が詠まれたとする先行研究は多いのであるが^③、ゆずるは（以下『万葉集』原文に則し弓絃葉と記す）については、時期について取り上げられている先行研究は無いが、その特徴によると春に花が咲き初夏に新旧の葉が入れ替わることから^④考慮すると、初夏の吉野において弓絃葉の状態について着目する機会はあると考えられるのではないだろうか。こういった点から、歌が詠まれた時期は初夏と確定出来るのではないかといえるのである。『日本書紀』において夏期は四月から六月までである為、贈答歌が詠まれたのは何時かという候補を『日本書紀』から挙げてみたい。なお、持統朝夏期における吉野宮への行幸であるが、合計三十一回の行幸の内、九回が該当するの

で挙げてみたい。

- ① 持統四年五月三日～帰京日不明
- ② 持統五年四月十六日～二十二日
- ③ 持統六年五月十二日～十六日
- ④ 持統七年五月一日～七日
- ⑤ 持統八年四月七日～帰京日不明
- ⑥ 持統九年六月十八日～二十六日
- ⑦ 持統十年四月二十八日～五月四日
- ⑧ 持統十年六月十八日～二十六日
- ⑨ 持統十一年四月七日～十四日

持統朝は、『日本書紀』並びに『続日本紀』によると持統十一年七月末日までの為、この九回の中に贈答歌が詠まれたとしてよいであろう。先行研究等によると、契沖の『萬葉代匠記』・山田孝雄の『万葉集講義』、また、『万葉集講義』を引用したものとしては『新日本古典文学大系 萬葉集一』・『新編日本古典文学全集 萬葉集①』が、①・②の行幸時、身崎壽氏が④の行幸時、伊藤博氏の『萬葉集釋注』等が仮定ではあるが④の行幸時、川上富吉氏・木村千恵子氏が⑨の行幸時との説を挙げている。どの説においても、時期・日程共に納得出来るのであるが、弓削皇子と額田王双方の「社会的立場」も含めて考慮すると、個人的には④～⑨は該当しないのではないかと推測されるのである。では「社会的立場」とは何であるかという点、『日本書紀』及

び『懷風藻』の記述を挙げてみたい。

『日本書紀』及び『懷風藻』の記述

『日本書紀』

卷第三十 高天原広野姫天皇 持統天皇

七年春正月辛卯朔壬辰、以淨広菴皇子高市、淨広式授皇子長与皇

子弓削。

九年春正月庚辰朔甲甲、以淨広式授皇子舍人。

『懷風藻』

葛野王。二首。

(前略) 王子進奏曰。我国家為法也。神代以來。子孫相承以襲天位。若兄弟相及則乱從此興。仰論天心。誰能敢測。然嗣自然定矣。

此外誰敢問然乎。弓削皇子在座。欲有言。王子叱之。乃止。(後略)

まず『日本書紀』の記述によると、持統七年正月に実兄である長皇子と共に淨広式の叙位をされていることから、自身の将来において仮に多少の不安感等を抱いていたとしても、現実には叙位をされている為、弓削皇子が詠んだ歌の特徴と同一視されがちである人生の「切なさ」「儂さ」「無常観」といった観念をこの時点においては持ち得ないであろうと想定出来るからである。また、持統七年正月以降、時期に差異はあるが天武天皇出生の高市皇子・舍人皇子も、叙位をされていることから現実には自身の将来に、一切希望が持てないという様な

ことは無いと考えられるのであり、その様な状況下では「古に恋ふる鳥かも」とは詠まないのではないだろうか。むしろ、希望が持てないと想定したのであれば『日本書紀』及び『懷風藻』の記述によると、持統十年七月十日に太政大臣である高市皇子が薨去し、その後皇太子を決定する為の会議で額田王の孫の葛野王が「天皇位は子孫直系であり、兄弟間だと争いが起こる」と意見をし、それに唯一人反論しようとしたのが弓削皇子なのであるが、それは葛野王に妨げられて失敗した結果として、軽皇子（持統天皇の孫）が皇太子に決定し、葛野王は持統天皇に拔擢されたことが、「社会的立場」に該当するといえるのである。

以上の「社会的立場」を考慮すると、弓削皇子と兄の長皇子が持統七年正月に叙位をされており、その後も異母兄弟の舍人皇子の叙位という社会的地位が得られたこと並びに、高市皇子が薨去した持統十年七月十日以降に、皇太子決定の座において対立状態となった葛野王の祖母である額田王に「古に恋ふる鳥かも」という感情の共有を求める歌を詠むことも、また額田王も弓削皇子の感情を理解し「我がおもへること」と詠んで返答することは不可能なのではないだろうか。よって、④～⑨の間に贈答歌は詠まれることはない¹⁾と本稿においては考慮したのである。また、①についても、滞在日数が不明な為、吉野宮から倭の京を二往復する日数が計算不可であることから除外することとした。従って、②・③の時期のどちらかであると考慮出来るのであるが、そうすると『日本書紀』の記載にもある様に「倭の京」は飛鳥浄御原宮を指すことになり、そこから吉野宮まで二往復するとなる

と、③では合計四日の滞在である為、日程上可能ではあるが、やや厳しいともいえるので本稿においては②を消極的ではあるが、贈答歌が詠まれた時期としたのである。

第二章 詠まれている物について

1. 望帝の故事について——ほととぎす——

先行研究によると、当初から弓削皇子が詠んだ鳥とは蜀の望帝の故事を踏まえた鳥であり、それを理解した額田王は鳥とはほととぎすだと歌に詠んだのであるが、蜀の望帝の故事について調査した所、六例が確認されたので挙げてみたい。

①『蜀王本紀』

望帝積百余歳。荆有一人名鼈靈。其尸亡去。荆人求之不得。鼈靈尸随江水上至郫、遂活。与望帝相見、望帝以鼈靈為相。時玉山出水、若堯之洪水。望帝不能治、使鼈靈決玉山、民得安处。鼈靈治水去後、望帝与其妻通。慚媿、自以德薄不如鼈靈、乃委国授之而去、如堯之禪舜。鼈靈即位、号曰開明帝。帝生慮保、亦号開明。望帝去時、子鵠鳴。故蜀人悲子鵠鳴而思望帝。望帝杜宇也。從天墮。

（紀元前～一世紀）

②『蜀史（抄）』後有王曰杜宇。教民務農、一號杜主。時朱提有梁氏女利、遊江原。宇悅之納以為妃。移治郫邑、或治瞿上。七國稱王、杜宇稱帝、號曰望帝、更名蒲卑。自以功德高諸王。乃以褒斜為前門、熊耳靈關為後戶、玉壘蛾眉為城郭、江潛綿洛為池澤、以汶山

爲牧畜、南中爲園苑。會有水災、其相開明、決玉壘山以除水害。帝遂委以政事、法堯舜禪授之義、遂禪位於開明、帝升西山隱焉。時適二月、子鵬鳥鳴。故蜀人悲子鵬鳥鳴也。巴亦化其教而力農務。迄今巴蜀民、農時先祀杜主君。開明位號曰叢帝。(後略)

③『後漢書張衡列傳第四十九』

(前略) 鼈令殪而尸亡兮、取蜀禪而引世。(後略)

(四世紀)

④『後漢書張衡列傳第四十九・李賢注』

鼈令、蜀王名也。令音靈。殪、死也。禪、傳位也。引、長也。楊雄蜀王本紀曰、荊人鼈令死。其尸流亡、隨江水上至成都、見蜀王杜宇。杜宇立以爲相。杜宇號望帝、自以德不如鼈令、以其國禪之、號開明帝。下至五代、有開明尙。始去帝號、復稱王也。

(四世紀末～五世紀)

⑤『蜀都賦』

(前略) 鳥生杜宇之魂、(後略)

(六世紀)

⑥『蜀都賦・注釈』

○杜宇 劉注所引の『蜀記』に「昔人有り。姓は杜、名は宇。蜀号して望帝と曰ふ。宇死す。俗説に云ふ、宇化して子規と爲る。子規(ほととぎす)は鳥の名なり。蜀の人子規の鳴くを聞くに、皆望帝と曰ふなり。」とある。『蜀記』は後漢の李膺(りよう)の『益州記』の中にあるという(李注義疏・六世紀)

以上、ここまで挙げてきた望帝の故事についてであるが、何種かの類型があることがいえるので、整理してみることとする。

1. 蜀の国王であった望帝の在位中に鼈靈の死体が長江を流れてきた生き返り、望帝と会見したところ、鼈靈は宰相に任ぜられた。その頃水害が発生し、鼈靈が水害を治めたのだが、このことで鼈靈が留守にした際に鼈靈の妻と望帝が密通しそのことを望帝が恥じたことも含め、政治を鼈靈に任せ、堯が舜にした様に帝位の禪譲を行い、望帝は立ち去った。その時、ほととぎすが鳴いていたので、ほととぎすの声を聞くと、蜀の人は望帝を思い出し悲しんだ。一方、鼈靈は即位し開明帝となったというものである。(①)

2. ①の内容から、鼈靈が留守にしたところ、鼈靈の妻と望帝が密通しそのことを望帝が恥じたという部分を削り、且つ一部に手を加えている。加えた内容とは、杜宇は、蜀の人に農業を教え、梁氏の娘である利を妃とした。杜宇は稱帝となったが、やがて望帝と名乗る様になった。やがて自画自賛を行う様になり、領地を開拓したがたびたび水害が起り、宰相である開明が水害を除き始めた為、望帝は政治を開明に任せ、堯が舜にした様に帝位の禪譲を行い、望帝は西山に上って崩御した。時は二月でほととぎすの鳴く季節であったことから、蜀の人は望帝を思い出してほととぎすが鳴くことを悲しみ、一方他国である巴国も望帝に影響されて農業に邁進したので、蜀と巴の人は農業を始める季節に杜宇(望帝)を祭るというものである。(②)

3. ②から、農業のことを削ったものである。(③・④)

4. 望帝の魂が、ほととぎすとなったというものである。（⑤・⑥）
なお、⑤についてであるが、注釈である⑥に詳しく挙げられている。
また、⑥にある李膺の『益州記』は、現在は散逸しており原本での確
認は不可であるが、李膺は後漢時代の人物であり、先に挙げた『後漢
書』において名前が確認されている。このことから、望帝の故事にお
いて、③・④より後の時代では、ほととぎす＝望帝という説がいえる
のだが、これは『文選』だけではなく、他の漢詩においても確認する
ことが出来るのである。

望帝の故事について——追記——

⑦『擬行路難十八首 其七』鮑照

愁思忽而至

跨馬北出門

拳頭四顧望

但見松柏園

荆棘鬱蹲蹲

中有一鳥名杜鵑

言是古時蜀帝魂

聲音哀苦鳴不息

羽毛憔悴似人髡

飛走樹間啄蟲蟻

豈憶往日天子尊

年此死生變化非常理

中心惻愴不能言

『擬行路難』を詠んだ鮑照は五世紀の人であることから、『文選』よ
りも一世紀古く望帝の故事を確認出来るのである。以上のことを踏ま
えて弓削皇子と額田王の贈答歌は成立しているとするのであれば、弓
削皇子と額田王が持つ漢詩文の知識は非常に高いことがいえるのであ
るが、それを確認する為に額田王の詠んだ歌を挙げてみたい。

額田王の、近江天皇を思ひて作りし歌一首

君待つと我が恋ひをれば我がやどの簾動かし秋の風吹く

（卷四・四八八）

この歌が踏まえている漢詩文は、『華山畿』と『文選』において確
認出来、『玉台新詠』巻二においても『文選』と同様の漢詩が確認出
来るので、順に挙げてみることにしたい。

①『華山畿・華山畿二十五首』

夜相思

風吹窗簾動

言是所歛來

（五世紀）

②『文選・情詩二首』

清風動帷簾

晨月燭幽房

佳人處遐遠

蘭室無容光
襟懷擁靈景
輕衾覆空牀
居歡惜夜促
在戚怨宵長
拊枕獨吟歎
感慨心内傷

(六世紀)

③『玉台新詠・情詩五首』

其三 清風動帷簾
清風動帷簾
晨月燭幽房
佳人處遐遠
蘭室無容光
衿懷擁虞景
輕衾覆空牀
居歡惜夜促
在戚怨宵長
撫枕獨吟歎
綿綿心内傷

(六世紀)

これらの漢詩において、風が簾を動かすと詠んでいる個所があるが(傍線部)、額田王の歌についてもその個所を踏まえて詠んでいることがいえる為、額田王の持つ漢詩文の知識は高いことが証明出来るのである。

ある。このことは弓削皇子においても同様であり、「古に恋ふる鳥かも」とほととぎすを仄めかした歌を額田王に詠んでいることから、弓削皇子が持つ漢詩文の知識が高いことがいえるのである。

では、この歌でほととぎすに例えられた人物は誰かという問題についてだが、それは、弓削皇子と額田王の両方が知っており、且つ身近にいた人物ではないかと考えられるのである。そうでない、二人の年代差を超えて感情の共有を可能とする贈答歌のやり取りは困難であるからである。窪田空穂氏の『萬葉集評釋 第一卷¹³⁾によると、ほととぎすに重ねられる人物は天武天皇とされているのだが、もう一人該当する人物として弓削皇子の祖父であり額田王と繋がりがあつたとされる天智天皇が考えられるのだが、弓削皇子が誕生した後も生存していたとは考え辛い為、天武天皇で良いといえるのである。中国(唐など)においてほととぎすは、『荊楚歲時記』¹⁴⁾・『酉陽雜俎』¹⁵⁾などによると『荊楚歲時記』では鳴く声を聞く者は離別を主る、聞く者不祥とされ『酉陽雜俎』では声をまねたところ、すぐさま死んでしまったとされ双方において不吉な印象を持つ鳥とされている。また、ほととぎすと重ねられる蜀の望帝の故事も、有能であつたが水害を治めることが出来ずに代理で宰相が水害を治めたことに加え、その為宰相が不在の折にその妻と密通したとあることから、あまり良い印象が無いことがいえる為、天武天皇の息子(弓削皇子)並びに過去に愛されて皇女を産んだ女性(額田王)であつても、『萬葉集』において神と称えられた天武天皇を貶める様な歌を詠んだとなると、天武天皇の皇后で後を継いで天皇となった持統天皇に天武天皇を貶められたと疑われること

が可能になり、そうすると弓削皇子と額田王はかなり危険な歌を詠んだことになるのだが果たしてそうであろうか。これについては月野文子氏も同様のことを論じており、この点に関しては同意をしたのである。

だが、弓削皇子と額田王の贈答歌において単に知識を試しただけとするには、望帝の故事を例として挙げるだけではなくさらに考慮する必要があるのだが、それにはほととぎすに重ねられる人物である天武天皇について考慮する必要があるのではないだろうか。天武天皇についてであるが、先述しているが神と称える歌が『万葉集』に詠まれているので挙げてみたい。

壬申の年の乱の平定して以後の歌二首

大王は神にしいませば赤駒の腹這ふ田居を都と成しつ

（卷十九・四二六〇）

右の一首は、大將軍贈右大臣大伴卿の作なり。

大王は神にしいませば水鳥のすだく水沼を都と成しつ

（卷十九・四二六一）

作者未だ詳らかならず

右の件の二首は、天平勝宝四年二月二日に聞きて、即ちここに載するものなり。

この歌が証明する様に、天武天皇は壬申の年の乱後、神と称えられており、そのことは息子である弓削皇子も額田王も理解しているはず

であるが、あえて天武天皇をほととぎすに重ねた歌を詠んでいることから、望帝の業績を再度確認してみると、望帝が鼈靈に行った行為で堯が舜にした様にと記されている帝位の禪譲があるが（望帝の故事について―ほととぎす―引用①・②・④）、帝位の禪譲とはどの様な行為なのであるかを『史記』及び『大漢和辞典』に記述されていることから挙げてみたい。

『史記』及び『大漢和辞典』の記述

『史記』

五帝本紀第一

堯帝

（中略）堯立七十年得舜。二十年而老、令舜攝行天下之政、薦之於天。堯辟位凡二十八年而崩。

舜帝

（中略）舜乃豫薦禹於天。十七年而崩。三年喪畢、禹亦乃讓舜子。如舜讓堯子。諸侯歸之。然後禹踐天子位。

『大漢和辞典・堯・舜』

①堯：古の聖天子。陶唐氏の號。

②舜：古の聖天子の名

『大漢和辞典・禪讓の意味』

天位を有徳者に傳へゆづること。天子が生存中に其の位を他姓にゆづること。

禪讓とは、天位を有徳者並びに他姓の人物に譲ることであるが、これを行った天子として代表とされているのが先に挙げた古代中国の皇帝である堯・舜であり、また、その治世においても堯・舜は共に政治を安定させ、国を豊かにし人民に愛され聖天子と称えられている。このことから、堯が舜にした様に禪讓を行った望帝も、鼈靈の才能を理解していた聖天子と称えられることが出来るのではないだろうか。こう考えると、天武天皇を望帝と重ねても天武天皇Ⅱ聖天子とすることが可能となり、弓削皇子と額田王は天武天皇を貶める様な危険な歌を詠んだという疑いを掛けられることは無く、むしろ聖天子と称えていることになり、持統天皇においても貶められたと疑いを掛けることは無いといえるのである。では、天武天皇と禪讓に係る点はあるのだろうか。ここで、『日本書紀』の一文を挙げてみたい。

卷第二十七 天命開別天皇 天智天皇

庚辰、天皇疾病弥留。勅喚東宮、引人臥内、詔曰、朕疾甚。以後時事後屬汝、云云。(卷第二十七・天智天皇十年十月十七日)

卷第二十八 天淳中原瀛真人天皇 上 天武天皇

天皇勅東宮、授鴻業。(卷第二十八 天武天皇即位前紀)

以上の様に、『日本書紀』においては天智天皇が病の時に、病床で天武天皇に天皇位を譲りたいと重複して記述されていることから、天武天皇は天智天皇から禪讓を受けていたということがいえるのである。このことから、天武天皇は天智天皇から禪讓を受けるだけの聖天子足

りえる人物であるということになり、同様に天智天皇も禪讓が行える聖天子だといえるのである。これについて、寺西貞弘氏の先行研究があるが¹⁷⁾従来、天武天皇は壬申の乱で勝利した後皇位についていることから、禪讓とは無縁と考えられるのだが、先述したが『日本書紀』には禪讓のことが卷第二十七・卷第二十八と重複して記述されていることから、当時の皇位継承においては天智天皇から天武天皇へ続くといった意識があつたのである。事実、大友皇子が弘文天皇として正式に即位が認められたのは明治時代になってからであり、当時の意識では考えられなかつたのである。その意識は弓削皇子並びに額田王も当然持っていたからこそ、季節的なこともあるが、ほととぎすを歌に詠み同様に初夏に新旧の葉が入れ替わるといことも含め、禪讓という行為に相応しい植物として弓削皇子は弓絃葉を歌に詠んだといえるのではないだろうか。では、弓絃葉とはどのような植物なのであろうか。

2. 弓絃葉と松——日本と中国・倭と唐——

弓絃葉についてであるが、従来、初夏に新旧の葉が入れ替わることから弓削皇子の歌並びに弓絃葉自身の印象と重ねて無常観を感じさせる植物という認識がされがちであるのだが、その特徴から禪讓という行為を意識させるのに相応しい植物であるのではないかと先述した。しかし、「無常観」と「禪讓」は単語を見る限り相反する意味があるともいえるので、弓絃葉について知る為に木下武司氏の著書である『万葉植物文化史』¹⁷⁾から引用することとした。

ユズリハの語源は、「譲る葉」に由来し、春に出た若葉が大きくなる初夏に古い葉が落ちるのを古い葉が新しい葉に世代を譲ると見立てたといわれる。貝原益軒も「春新葉生ト、ノヒテ後舊葉ヲツ故ニユツリハト名ツク」と述べ、同じような語源を記述している。『和漢三才圖會』にも譲葉木とあり、これも同じ語源に基づく。実は、これに似た内容の記述が『本草綱目』の楠の条にあり、李時珍は「歳を経て凋まず新陳相換す」と譲葉木の語源を解いている。新旧の葉が交代する発想を、中国伝来としそれが日本の習俗に定着したとも考えられるが、中国の古い典籍にそれを裏付ける証拠はなく、一方、ユズリハの名は万葉集にまでさかのぼるから、やはり日本起源であり、中国名の譲葉木・譲木の名の方がむしろ日本語名の影響を受けたと考えるのが自然だろう。（中略）『大和本草』に親子草の名があるように、常緑の葉がよく繁り新旧葉が円滑に交代するユズリハに、親から子へ世代が絶え間なく継承され一族が繁栄する様を重ね合わせて、ユズリハを縁起のよい植物と考えた。

引用によると、弓絃葉は、初夏に新旧の葉が入れ替わるという特徴から世代の交代を思わせ、一見「無常観」を感じさせる印象があるが実際は、親から子へ世代が絶え間なく継承され一族が繁栄する様を重ね合わせるといことが出来る。この「親から子へ世代が絶え間なく継承され一族が繁栄する様を重ね合わせる」といことが『万葉集』の時代に実際にあるかどうかは不明であるが、初夏に新旧の葉が入れ

替わるという特徴から禪讓によって聖天子の代が続くことと重ねる意識を持つことは可能だといえるのである。このことから、弓削皇子が弓絃葉を歌に詠んでも従来の様に弓削皇子が「切なき」・「儂さ」・「無常観」を意識させる皇子という印象については再考する必要があるといえるのではないだろうか。また、弓絃葉についてであるが、『万葉集』において、弓削皇子の歌以外で弓絃葉を詠んだ歌が一首あるので挙げてみたい。

あど思へか阿自久麻山のゆずるはの含まる時に風吹かずかも

（卷十四・三五七二）

この歌は比喩歌であり、弓絃葉を若い女性に見立てて詠んでいるのであるが、弓絃葉が開ききっていない。これから開こうとしている状態であると詠まれていることから、弓絃葉の詠まれている季節としては新芽が出て葉が開く前の頃であり、花が咲く前の春が想定されるといえるのではないだろうか。また、この歌に「無常観」を感じさせるものはない。むしろ、春が来て成長を始めた若い弓絃葉と若い女性に共通する初々しさが、弓絃葉は風が吹くことによって散らされる可能性が、若い女性は男性に言い寄られるといった危険性も含まれるといった比喩として詠まれている。このことから考えると、『万葉集』にある弓絃葉の歌は合計二首あるが、どちらにも無常観を感じさせる印象はないことがいえるのである。むしろ弓絃葉の季節によっての変化を感じることが可能である。すなわち、卷十四・三五七二の比喩歌

では春にこれから成長するであろう弓絃葉の、弓削皇子の歌では初夏に成長し新旧の葉が入れ替わる弓絃葉ということである。以上のことから、再度禪譲と（成長した）弓絃葉を結び付けて考えてみると、世代が絶え間なく継承されるという良い印象で捉えることが証明出来ることから、弓削皇子と額田王は天武天皇を貶めるといった危険な歌を詠んだということにはならないのである。むしろ、昔も天武天皇の徳によつて良い治世であつたが、それは、今の持統天皇に続いているという意味に通じることとなり、すなわち昔も良いが今も良いということになり、弓削皇子と額田王が昔は良かった（今はそうでもない）という意味の危険な歌を詠んだということにはならない為、持統天皇においても自身の治世が貶められたと疑いを掛けるといったことにはならないことに加え、弓絃葉という日本独自の植物文化を詠んだということがいえるのである。

このやり取りの後、題詞にもある様に弓削皇子は額田王に松の柯を贈るのであるが、これについては松とはどの様な植物なのであるのか、先にも引用した木下武司氏の著書である『万葉植物文化史』¹⁸から再度引用することとしたい。

万葉集で「松」の字が多用されているのは、当時の中国で松が長寿・節操・繁栄を象徴する瑞木とされており、その文化的影響力によるものである。大伴家持・山上憶良などそうそうたる万葉歌人が詠っていて、中国文化の影響は万葉歌の随所に見ることが出来る。中国では『史記』『龜策列傳』に「松柏は百木の長たり、

而して門閭（村里の入口門）を守る」とあるように、柏とともに門閭に植えられ、集落を守る神の依代と考えられた。日本には門閭はないからこの風習はないが、各門戸に飾る門松の風習は祖霊神・穀霊神を迎える信仰に基づくこととされ、同源と考えられる。（中略）中国では松は長寿だけではなく節操の象徴でもあつた。『論語』に「歳寒くして然る後に松柏の凋むに後るるを知るなり」とあるように、寒い冬でも強風が吹いても緑を絶やすことなく変わらないので、人に節操があるべき例として譬えられた。（中略）既に門松に松とともに竹をたて、シダ・ユズリハの注連縄を飾る風習があつたことを記しており、民俗学的観点から注目に値する。

この様に、松は中国と日本で長寿の植物であるという共通の認識がある。また、中国においては日本には無い節操という意味も持ち、日本において松は後年門松となり、正月に自宅前に飾られる様になるが時代によってはシダや、先に記したユズリハの注連縄を飾る風習もあることから、吉祥の象徴であるということがいえるのである。次に蘿も漢詩文においては松の長寿を顕示するものであることと、蘿に女という漢字をくわえて女蘿という単語にすると、漢詩文においては男性に縋る女性というとらえ方をされていることから、¹⁹弓削皇子が額田王に松が枝を贈つたのは、先の贈答歌において自身の漢詩文の教養に対し理解をしてくれた額田王の長寿を願つたことに加えて、二人の贈答歌が仲の良い男女によるものであることの証明であつたということがいえるのである。また、『万葉集』において、弓削皇子と額田王の贈

答歌以外で松を詠んだ歌は計七十九首あるが、歌によっては「待つ」に掛けていることもある為、相聞に使用してもおかしくはない。これらのことよって、先にも記述したが、弓削皇子と額田王が昔は良かった（今はそうでもない）という意味の危険な歌を詠んだという疑いがかけられることが完全にならぬのであり、また弓絃葉と松を詠むことよって日本と中国（倭と唐）に対する植物文化の融合に到るのではないかと考慮出来るのである。

第三章 贈答歌の構成について

ここまで、弓削皇子と額田王の贈答歌について詠まれている物から論じてきたが、贈答歌の構成について考慮すると、この贈答歌については「起承転結」がある構成として考慮したほうが良いのではないであろうか。その根拠となるものとしては、一一三の歌が弓削皇子からの贈答品に対する額田王の返歌ということもあるが、そこには先の二首にあった共有する「想い」は含まれておらず、弓削皇子に対してだけの額田王の「想い」があるからである。一一一～一二の歌においては、間に「古に恋ふる鳥・古に恋らむ鳥（天武天皇）」という共通点があり、そこに二人の想いが共有されている。この二首が「起」「承」となり、一一三の歌を詠むきっかけとなる「蘿生ひたる松の柯」は、弓削皇子が額田王の為だけに自身の「想い」を込めて贈った物であることから、歌では無く題詞ではあるが、「蘿生ひたる松の柯を折り取りて遣はせし」という弓削皇子の行為は「転」になることがいえ、ここで古への「想いの共有」から今の「互いへの想い」に変化すると

いえるのではないだろうか。だとすると、額田王の返歌も弓削皇子の為だけの「想い」があり、題詞も含めたこの一首だけで「今の互いへの想い」を表現したということになる。このことから、一一一～一二の歌は二人の「恋ふる鳥・古に恋らむ鳥（天武天皇）」という共通項有りきの「想いの共有」といえ、それを繋ぐ一一三の歌の題詞にある弓削皇子の贈答品である「蘿生ひたる松の柯」は、当初の想いを共有してくれたことによる感謝並びにその様な額田王個人への「想い」を含んだ物であり、対する額田王の返歌は贈答品に対する感謝並びに弓削皇子個人への「想い」を詠むという、「誰も間に入らない二人だけの想い」ということがいえるのである。

この様に考慮することよって、弓削皇子と額田王の贈答歌は遣り取りが進むに従い、「恋ふる鳥・古に恋らむ鳥（天武天皇）」といった共通項を含んだ想いから、「蘿生ひたる松の柯を折り取りて遣はせし」・「玉松が枝は愛しきかも君がみ言を持ちて通はく」といった二人だけの想いへと変化していく。それに伴い、二人の想いがより近付いていくという点並びに、漢詩文の影響を受けながらも、詠まれている植物から日本独自の考えも交えた知的な遣り取りをしていたという点からも相聞として相応しい歌であるということがいえるのである。

終わりに

ここまで考察してきたが、「ほととぎす」が導く望帝の故事については禪譲を行なったことから、聖天子と同様といえることが可能であり、禪譲については「弓絃葉」について考えていくと、新旧の葉が入

れ替わる、すなわち永久に継承されていくという様に、どちらも良い印象で捉えることが出来るのである。このことから、弓削皇子と額田王の贈答歌が「昔を懐かしむ」という結論も、かなり従来の考えとは違ったものになるということがいえるのである。

さらに、弓削皇子の歌の特徴とされる「切なさ」「儂さ」「無常観」という解釈も、改めて考え直すことが出来るのではないだろうか。歌に詠まれている植物である弓絃葉や松においても、良い印象で捉えることが出来るのであり、日本と中国で共通の捉え方をされている物もあれば、日本独自の捉え方をされている物もある。こういったことから、弓削皇子と額田王の贈答歌を詠まれている物から考察していくと、「ほととぎす」で漢詩文の影響を受けながらも「弓絃葉」で周囲の疑いを一蹴するだけの理由を持たせ、同時に日本独自の考えも交えながらも「松」で二人の想いが双方の距離をより近づけるといった複合的なやり取りをしていることが構成から読み取れるという、相聞として高水準な歌であることがいえるのである。

〔注〕

- (1) 『弓削皇子』吉井巖 帝塚山学院大学研究論集第三集 一九六八
- (2) 『弓削皇子と額田王の贈答歌——どのように懐旧を読み取るか——』月野文子 香椎潟 二〇〇一
- (3) 『契沖全集 第一巻』久松潜一 岩波書店 一九七三
- (4) 『万葉集講義』山田孝雄 宝文館 一九七〇
- (5) 『新日本古典文学大系 萬葉集二』佐竹昭弘 山田英雄 工藤力男 大谷雅夫 山崎福之 岩波書店 一九九九

- (6) 『新編日本古典文学全集 萬葉集①』小島憲之 木下正俊 東野治之 小学館 一九九四
- (7) 『いにしへに恋ふらむ鳥はほととぎす——弓削皇子の額田王との贈答歌——』身崎壽 萬葉 一九八九
- (8) 『萬葉集釋注二』集英社文庫ヘリテージシリーズ 伊藤博 集英社 二〇〇五
- (9) 『持統十一年四月の霍公鳥——弓削皇子と額田王の吉野の宮贈答歌について——』大妻女子大学紀要——文系——川上富吉 一九九三
- (10) 『弓削皇子と額田王の贈答歌について』成城国文 木村千恵子 一九八四
- (11) (6)・(8)と同。
- (12) (1)と同。
- (13) 『萬葉集評釋 第一巻』窪田空穂 東京堂出版 一九八四
- (14) 『荆楚歳時記』東洋文庫324 守屋美都雄 布目潮風 中村裕一 平凡社 一九七八
- (15) 『西陽雜俎3』東洋文庫307 今村与志雄 平凡社 一九八一
- (16) (2)と同。
- (17) 『古代天皇制史論——皇位継承と天武朝の皇室——』寺西貞弘 創元社 一九八八
- (18) (17)と同。
- (19) (7)と同。

なお、本文中における歌並びに漢詩文の引用は、『新日本古典文学大系 萬葉集一〜四』佐竹昭弘 山田英雄 工藤力男 大谷雅夫 山崎福之 岩波書店 一九九九〜二〇〇三・後岩波文庫『万葉集一〜五』佐竹昭弘 山田英雄 工藤力男 大谷雅夫 山崎福之 二〇一三〜二〇一五、『新編日本古典文学全集 日本書紀卷③』小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 小学館 一九九八、『中国古典小説選1 穆天子伝・漢武故事・神異経・山海経他』竹田晃 黒田真美子 明治書院 二〇〇七、『中国古典新書統編 華陽国史』中林史

朗 明德出版社 一九九五、『全譯後漢書 第十五冊』渡邊義浩 渡邊將智 汲古書院 二〇〇八、『文選（賦篇）上』中島千秋 明治書院 一九七七、『中国名詩選（中）』松枝茂夫 岩波書店 一九八四、『新釈漢文大系 第十五卷 文選（詩篇）下』内田泉之助 網祐次 明治書院 一九六四、インターネットサイト「百度百科」<http://kaike.kaidu.com/item/擬行路難> 二〇一八、『新釈漢文大系 第六十卷 玉台新詠 上』内田泉之助 明治書院 一九七四、『新釈漢文大系 第三十八卷 史記（一）』吉田賢抗 明治書院 一九七三、『大漢和辞典』卷三・卷八・卷九 大修館書店 一九九九による。
なお、『万葉集』の原文において「ほととぎす」は「霍公鳥」と、「ゆずるは」は「弓絃葉」と記載されているが、便宜上並びに引用文献の関係上表記を原文に即していない箇所がある旨、及び漢詩文について返り点等の表記を引用通りに即していない旨、了承頂きたく存ずる次第である。

（たけだ はるこ） 文学研究科文学専攻博士後期課程）

（指導教員：榎本 福寿 教授）

二〇一八年十月二日受理